

Bar SINGLES 06-6366-1131 叶レジャービル2F 8/26(土)19:00~ FISHMANS'Affair ~オレンジ病棟~	Bar THIRD STONE 06-6365-7177 カーサ梅田B2-1 9月 詩について語る会(後)	Bar RAIN DOGS 06-6311-1007 8/22(火)19:30~ 湯才とコント、若手で笑え! 9月 新聞を斜に構えて読む会	Bar ちやうか 06-6361-9169 新谷ビル1F 9/9(土)16:00~ 未発表曲を聴く会
Bar binocle 06-6361-7188 日宝東飯急 レジャービル 2F 8/11(金)19:30~ 自主映画について語る会	Bar BANG 06-6365-1227 日宝東飯急 レジャービル 2F 9月 ピンク映画について語る会	world food 楽園食堂 06-6363-3858 梅田スペースビル B1F 毎日曜12:30~17:00 サルサレコード鑑賞会 &ドミノ大会	cafe restaurant STAFF 06-6361-6191 OMS 1F 別冊を参照



上/「扇町Talkin' About」のフライヤー。中/淀屋橋 odona での「御堂筋Talkin' About」開催の様子。下/都市魅力研究室で開催されている「うめきたTalkin' About」。写真提供/筆者(以下すべて)

2011年には旧大阪市立愛日

御堂筋Talkin' About

「淀屋橋 odona」内に大阪市が設けたまちづくり情報発信拠点として「御堂筋Talkin' About」をスタート。近隣の喫茶店主、近代建築ビルのオーナーらとユニットを組み、月1回のペースでサロンを開催した。扇町では文化的な事柄や起業についてのテーマが多かったが、御堂筋では観光魅力・都心居住・水辺・映画・ものづくりなど、「大阪のまちづくり」をテーマとして取り上げ、ゲストをお呼びして話題提供いただき、その後集まった方々全員に喋って

小学校跡地に建つ複合商業施設「淀屋橋 odona」内に大阪市が設けたまちづくり情報発信拠点として「御堂筋Talkin' About」をスタート。近隣の喫茶店主、近代建築ビルのオーナーらとユニットを組み、月1回のペースでサロンを開催した。扇町では文化的な事柄や起業についてのテーマが多かったが、御堂筋では観光魅力・都心居住・水辺・映画・ものづくりなど、「大阪のまちづくり」をテーマとして取り上げ、ゲストをお呼びして話題提供いただき、その後集まった方々全員に喋って

うめきたTalkin' About

2013年、大阪ガスは「グラフィフロント大阪」開業時に、「都市魅力研究室」という、都市開発やまちづくりの知見を集め、新たなまちづくりのあり方を提案することを目的とした施設を設置した。

同施設の立ち上げ・運営を担当した私は、オープンを機にサロンの拠点をここに移し、「うめきたTalkin' About」と名称を変更して現在まで続けている。テーマはまちづくり・ソーシャルデザイン・地域課題解決などで、ゲストを迎えて30〜40分間話題提供いただき、その後90分間、参加者全員に話していただくという形で進行している。最近では地域で興味深い活動をしている方をゲストに招き、議論を深めるとともに活動自体の情報を発信することを意識している。

『CEL』を振り返る……………第5回 「トーキング・カフェ」の拡がり

山納 洋
Yamanoh Hiroshi

“共通の関心を持った人たちが語り合うサロンが近年注目を集めている”
2012年11月発行の『CEL』102号では「トーキング・カフェ」というタイトルでTalkin' Aboutの取り組みを紹介した。それから12年、プロジェクトがどう拡がったかを今回の特集で得た知見とともに、あらためて紹介したい。

扇町Talkin' About

私はOMSマネジャーを務めていた2000年に、「扇町Talkin' About (トーキン・アバウト)」という企画を始めた。これは決められたテーマに興味ある人が集まり、語り合うサロンで、「様々な文化ジャンルに関心ある人たちが出会

私はOMSマネジャーを務めていた2000年に、「扇町Talkin' About (トーキン・アバウト)」という企画を始めた。これは決められたテーマに興味ある人が集まり、語り合うサロンで、「様々な文化ジャンルに関心ある人たちが出会



「トーキング・カフェ」の拡がりについてのレポートが掲載された『CEL』102号。



上/日替わりマスター制でさまざまな試みが行われた「Common Bar SINGLES」。下/演劇、音楽、アートを中心とした実験のための場として親しまれた「common cafe」。

Common Bar SINGLES

2001年には、「Common Bar SINGLES」という日替わりマスター制のバーの運営に関わった。扇町「Talkn' About」の会場でもあった「Bar SINGLES」の閉店に際し、その空間を残すために「日替わりマスター」という仕組みを考え出し、月に1回マスターになってくれる人たちを募って立ち上げている。場所は大阪市北区堂山町。雑居ビルの2階の、カウンターのみ12席のこぢんまりした

空間だった。

マスターを務めてくれたのは、ライブハウスのブックキングマネージャー、映画館支配人、フリーペーパー編集者、美術家、写真家、学生など、さまざまなバックグラウンドを持った方々だった。通常のバー営業だけでなく、イラストレーターが作品を展示したり、サラーマンが一晩中レコードをかけていたり、ラテン系の人たちが集まったり、演劇関係者が集まったり、十数人だけお客さんを入れてライブを開催したりと、多様で小さな実験の場としても活用され

ていた。私自身が運営に関わったのは2004年までだったが、その後も代替わりを重ねつつ19年間継続し、最終的には2020年のコロナ禍で閉店となっている。

common cafe

2004年には、大阪市北区中崎町で日替わり店主制カフェ「common cafe」を始めている。場所はビルの地下1階にあり、広さは約20坪で、通常営業で24名、音楽ライブや演劇公演の場合は50

場を提供すること、カフェ開業を志す人たちが無理なく自分たちのやりたいことを試せる場所であることを目指していた。
common cafeの取り組みは2023年夏まで19年半続き、「談話室マチソワ」の立ち上げに合わせ終了。店舗は店主の一人が引き継ぎ、「ACT cafe」と名前を変え、実験劇場として現在も運営されている。

談話室マチソワ

2023年10月に、大阪市北区・扇町公園の南側に「扇町ミュージアムキューブ」と名付けられた、3つの劇場と7つのギャラリー・練習室・会議室を備えたシアターコンプレックスがオープンした。同施設は医誠会国際総合病院の建物の1階から3階に設けられており、(株)シアターワークショップという、劇場の設計・コンサル・運営を行う会社が運営を担当している。

扇町ミュージアムキューブの1階には、キッチンを備えたサロン

スペースが設けられている。私は

ここを「談話室マチソワ」という、店主がお客さんに話しかける場として立ち上げた。マチソワではcommon cafeの有志メンバーを中心とした25名が交替で店に立ち、サロンとして運営しつつ演劇や映画のお客さんと話をしたり、講座やワークショップなどを開催したりしながら語らいの場を設けている。マチソワは劇場の中にあるとともに病院の中にもあり、またお店が扇町という多くのクリエイターが事務所を構えている街の一角にあることから、より多様な立場の人たちが集える場にしていき

たいと、日々実践を重ねている。

場づくりをめぐる視野の拡大

『CEL』102号では、ドイツの社会学者ユルゲン・ハーバーマスの著書『公共性の構造転換』（第2版1994年、未来社）の中で、19世紀のヨーロッパにおいて、文化や芸術に関心を持つ市民がコーヒールーム・サロン・読書会に集い、開かれた雰囲気の中で文芸的な議論を交わし、そこから市民的公共圏（コモンズ）が形成され、やがて政治について公に意見を交わす

場へと変化していったことを指摘していた。昨年始めた談話室マチソワはまさに、劇場という空間の中に人々が語り合う場を作り、そこからコモンズを生み出していくという新たな実験であった。

今回の特集「場づくりのその先へ——つながりから社会を変えていく」の取材を通じ、私自身も視野を大きく拡げることができた。佐々木秀彦氏は『文化的コモンズ』（2024年、みすず書房）の中で、全国にあまたある博物館、図書館、公民館、劇場・音楽堂が、人が集い、つながりを生み出し、そこから何かを生み出す場となる可能性について、多くの事例とともに述べている。イタリアのデザイン研究者、エツイオ・マンズイーニは、デザインする能力は誰にでも備わっていること、自分たちの生活をより望ましいものに変えていく取り組みは、民主主義の実践に他ならないこと、人々が出会い、コラボレートするための「うっわ」を作り、触発を起こすことが、デザイン専門家の役割として求められていると提唱している。コミュニティデザイン実践家である

坂倉香介氏は、小さなプロジェクトを起点に、近接性に基づくケアし合える関係性を生み出した先に、町全体を居場所に変えていくという道筋を示している。そして『あそびの生まれる場所』（2017年、ころから）、『あそびの生まれる時』（2023年、同）の著者・西川正氏は、知らない人と喋る機会を意図的に作ることで、あそびを通じて関係性を編み直すこと、そこから自治の感覚を取り戻すことが、関係性が希薄になり、「お客さま化」が進む現代社会において強く求められていると指摘している。

人々が集い、アートや文化について議論を交わすという営みは、地域の魅力を見出したり、地域課題を意識して行動を始めたたり、コミュニティや公論を形成したりといった可能性を秘めている。それだけでなく、ケアし合える関係を生み出し、地域での暮らしを豊かなものに変えていくことができる。このことを、談話室マチソワでのさらなる実践を通じて、またさまざまなフィールドにおける取り組みをリサーチし続けることで、より深く理解していきたい。



上/2023年オープンのシアターコンプレックス「扇町ミュージアムキューブ」外観。下/「扇町ミュージアムキューブ」1階の「談話室マチソワ」。